



TITLE:

# <研究論文>「男やもめ」研究に関する理論的概観：配偶者との死別経験を有する男性はなぜ脆弱なのか

AUTHOR(S):

小林, 信一

---

CITATION:

小林, 信一. <研究論文>「男やもめ」研究に関する理論的概観：配偶者との死別経験を有する男性はなぜ脆弱なのか. 教育方法の探究 2006, 9: 65-71

ISSUE DATE:

2006-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/190319>

RIGHT:

## 「男やもめ」研究に関する理論的概観

——配偶者との死別経験を有する男性はなぜ脆弱なのか——

小林 信一

### 1. はじめに

人生において配偶者の死というものは最もストレスフルな出来事である。実際、これまで喪失経験というものは理論的にも実証的にもさまざまに注目されてきたものである(W. Stroebe & M. Stroebe 1993 など)。これまでの理論的、実証的データは、原初的な反応に関するものが多く、思い焦がれる感情や悲しみ、悲痛の感情に焦点が当てられてきた(Bowlby, 1980; Weiss, 1993 など)。それらの研究に共通するものとして、死別という喪失に対する原初的な反応に、衝撃を受けること、死を受け入れないことがあげられる。しかし、それに続く過程には明らかに違いが見られる。

ある研究では、精神的兆候は配偶者の死別後数ヶ月で減退していくという(Windholz ら, 1985)。しかし、死別経験者の中には数年たっても抑うつ傾向が報告された例もあるという(Bruce, Kim, Leaf, & Jacobs, 1990; Clayton, 1990 など)。Wortman ら(1993)によると、20年程度の年月で、配偶者と死別した人の抑うつ傾向が、まだ配偶者のいる人と同様になるという(Wortman, Silver & Kessler, 1993)。また、いくつかの研究では、未亡人と配偶者のいる女性の抑うつ傾向に差がみられなかったり(Lund, Caserta, & Diamond, 1993)、死別経験2年後には差がみられなくなったという研究もある(Stroebe & Stroebe, 1991)。Ungar & Florian(2004)によると、このような結果の差は、分析手続き、被験者の年齢、抑うつの定義の違いによるものであるというが、その違いの理論的探求は、以前はKatz & Florian(1986)によるものに終始していたと考えられる。つまり、悲嘆の後半においては、一度激しい感情が減退すると、悲しみの反応は個人、家庭、文化的な要因により影響を受ける違いがあるからであるということで一応の収束をみせていた。しかし、その後の研究により、性差

により配偶者の死による適応が異なることが明らかとなってきた(Gillbar & Dagan, 1995; Wortman ら, 1993)。このような流れから、死別経験においては男女を区別して研究するという傾向になってきている。

死別に対する反応には性差のパターンがあるということがこれまでの死別研究の中で言われており、男性の方が女性に比べ健康面で脆弱であり、そのような脆弱性は、ソーシャルサポートを受ける程度の差が原因ではないかといわれていた(M. Stroebe & Stroebe, 1983 など)。しかし近年の研究の中で、このような脆弱性の性差は、単にソーシャルサポートを受ける程度の差ではないのではないかという議論が持ち上がっている。

### 2. 配偶者との死別研究—性差への着目

死別経験による健康への影響の性差は、相対的なリスク(relative risk)として扱われてきた。Relative risk とは疫学の分野で、病気になるリスクファクターを潜在的に持つ割合のことであるが(Jeffery, 1989)、死別経験者とまだ配偶者のいる人との相対的な差に焦点を当てることで、性差による健康への相違が考えられてきた。

これまでの死別経験者の臨床的な研究では未亡人を対象としたものが多いが(河合, 1984 など)、人口統計的に考えても、これら女性の死別経験者の研究が盛んに行われてきた背景が考えられる。例えば平成12年の総務省統計局の報告によると、配偶者との死別経験を有するものの比率は男女で6:1であり、未亡人が男やもめよりも多いが、それは女性の平均寿命が男性よりも長く、年上の男性と結婚する傾向があり、男性よりも再婚することが少ないからである。総数的には女性のほうが男性よりも死別経験者は多いので、カウンセラーが女性の死別経験者に多く出会うとしても、未亡人が男やもめよりも死別経験による抑うつのリスクが

高いといえるわけではない。

### 3. 配偶者との死別経験に対する反応一性差の実証研究

一般的に、死別の経験をした人は健康へ有害な影響をもたらすといわれている。死別の経験をした人は、まだ配偶者がいる人に比べ、心理的な健康面への影響だけでなく身体的な健康にも、性別を問わず影響をもたらす。その影響が死に至ることも多く報告されている(Parkes,1996; W.Stroebe & Stroebe,1987; W.Stroebe, Stroebe & Schut,1993)。

#### (1) 心理的反応

多くの人は配偶者がなくなると苦痛や抑うつを感じるという(Parkes,1996; W.Stroebe & Stroebe, 1987)。また、このような抑うつなどの症状は精神科医やカウンセラーにかかるほど重篤な場合もあるが、たいていはそういった干渉がなくても時間と共に減じてくるものであるという(Clayton,1990)。このような観点から、死別の悲しみは通常の精神障害と同様に扱えるものではないと考えられる。

苦痛や抑うつの反応には悲しみだけでなく、配偶者の喪失への困惑、取り残されたことへの苦痛、配偶者がいないことによる孤独などへの焦点化も考えられる。悲痛の反応とは配偶者がいなくなったことに対する反応であるので、配偶者のいる人と死別経験を有する人との比較ということではできないだろう。男性よりも女性のほうが抑うつや感情の表出が多いということなどから(Derlega, Metts, Petronio, & Margulis, 1993)、安易に比較することはできないと考えられるものの、性差を考える際にはより一般的な概念である抑うつの尺度が使用されてきた。

Stroebe ら(2001)によると、男やもめのほうが未亡人よりも苦痛や抑うつを感じているという仮説は、2つの研究に端を発するという。Radloff(1975)の研究では、性別と結婚のステータスとの関連で、配偶者のいる女性は男性よりも抑うつ傾向が高いが、男やもめは未亡人よりも抑うつ傾向が高かった。つまり、男性のほうが配偶者の死別により抑うつ状態になりやすいのだろうという。また、Grick, Weiss, Parkes(1974)の死別後2～4年の研究によると、男やもめのほうが未亡人よりも

回復(recovery)に要する期間が長かったという。死別後1年の未亡人は配偶者のいる女性よりも抑うつ傾向が高かったが、追跡調査では有意な差が見られなかった。しかし男性においては明確な差がみられたという。

Umberson, Wortman, & Kessler(1992)の死別経験者の抑うつ傾向の長期縦断的研究によると、配偶者の死別は男性のほうが女性よりも影響が高かったという。Lee, Willetts, & Secombe(1998)においても、男やもめのほうが未亡人よりも相対的なリスクにおける死別経験による抑うつへの影響が高く、ソーシャルサポートによる変化はみられないという結果となっていた。

男やもめよりも未亡人のほうが抑うつ傾向は高いという研究もあるが(Berkman, & Charpentier, 1986; Chen, J.H., Bierhals, A.J., Prigerson, Holly G. Kasl, S. V., Mazure, C. M. & Jacobs, S., 1999)、それらは死別経験者のみを対象とした研究であり、まだ配偶者のいる人は含まれていないので、抑うつ傾向の性差を検討することはできないと考えられる。

#### (2) 身体的反応

死別経験後には、男女を問わず少なからず身体的健康へ影響があるとされている(Parkes, 1996; W.Stroebe & Stroebe, 1987)。その影響には性差によりパターンが異なるといわれているが、多くの研究では女性のほうが男性よりも健康の問題や病気を抱え、医療機関を利用しやすいという(Verbrugge, 1989; Wingard, 1984)。しかしこれには、男性のほうが女性よりも自分の身体的状態を知らせたくないと思っているからであるという考察がつけられている。

Glick(1974)によると、死別後14ヶ月の身体的健康の報告は、未亡人の方が男やもめよりも高得点であった。配偶者のいる統制群と比較すると寡婦のほうが身体的兆候得点は高くなっていたが、男やもめのほうが過剰な報告をする回答者が多かったという。Gallagher-Thompson ら(1993)によると、死別経験者の死亡率から、このような結果は、男性が自分の健康状態を低く評価しているからではないかという(Gallagher-Thompson, D., Futterman, A., Farberow, N., Thompson, L. & Peterson, J., 1993)。

### (3) 死別経験者の死

これまでの死別に関する研究が盛んになっている背景には、愛すべきものと死別という経験が、ある人々にとっては極端な精神的、身体的な悪影響と関連があるといわれてきたからである。しかし最も重要な問題は、死別の経験者が、精神的、身体的に脆弱だということだけでなく、自身もまた死にやすいということである。死別経験者の死は長期縦断的な多くの研究により、配偶者との死別した男性と配偶者のいる男性、配偶者と死別した女性と配偶者のいる女性の比較研究で、配偶者死別後の男性は死亡率が高いといわれている(Bowling & Windsor, 1995; M. Stroebe & Stroebe, 1993)。1984 年から 1990 年の間にアメリカで行われた縦断的なエイジングの研究では、未亡人が配偶者のいる女性に対し死亡率が 13% 高かったことに比べ、男やもめは配偶者のいる男性に対し 25% 高い死亡率だったという(Goldman, Korenman & Weinstein, 1995)。また、Martikainen & Valkonen(1996)における 1986 年から 1991 年に行われたフィンランドでの縦断的研究においても、配偶者死別後の死亡率は、配偶者のいる女性に比べ未亡人は 6% 高かったのに対し、配偶者のいる男性に比べ男やもめは 17% 高かった。男やもめの死亡率が未亡人に比べ低いという報告もいくつか見受けられる。例えば、1983 年から 1992 年までに行われたイスラエルにおける縦断的な死別研究においては、男やもめの死亡率は配偶者のいる男性に比べ 40% 高く、未亡人の死亡率は配偶者のいる女性よりも 50% 高く、相対的に女性のほうが死亡率は高くなっている。これは統計的数値としては有意な差がみられたとはいえず、人生への期待の性差が明確にあるというイスラエルにおける独特な性差であるという説明が付けられている(Manor & Eizenbach, 2003)。このようないくつかの例外を除けば、概して配偶者との死別経験後の男性は女性に比べ死亡率が高いといえるだろう。

日本国内の研究においては、配偶者死別後の精神的健康の性差の検討はなされていないが、河合ら(2004)による死別経験後 16 年間の追跡調査による病気や死亡のリスクは、男性の方が女性よりも 3 倍高かったという報告がされている。以上のように男性の配偶者死別経験後の脆弱性が実態的に明らかとなっているにもかかわらず、理論的な説明は十分になされてこなかつ

た。

### 4. 男やもめの脆弱性—理論的探求—

#### (1) ソーシャル・サポートと緩衝効果

妻は夫の主要な、時に唯一の相談相手であるが、女性には夫のほかにも相談相手を持つとされている(Lin & Westcott, 1991; Umberson, Wortman & Kessler, 1992)。女性は夫のほかにも親密な関係の他者を持ち、養育や他者との関係性の維持に従事する、というこのような相違は死別経験への適応にも適用され、男性よりもソーシャルサポートを受けることが多いことが緩衝(buffering)となって、未亡人は配偶者の死別経験から受ける影響を減じているといわれてきた。ここで言われてきた主な仮説は、配偶者との死別経験後、女性は男性に比べソーシャルサポートをより多く受けているという違いと、これらのソーシャルサポートの差が健康への性差をもたらしているというものだった。

認知ストレス理論によると、人生において死別のような重大な出来事が起こるとストレスフルになる背景には、再調整という変化が要求されるためであるとされている。ライフイベントにおけるストレスの強度は、個人が置かれる状況やコーピングの資源によるとされ、ストレスにうまく対処できないとネガティブな結果を生み出すといわれてきた(Lazarus & Folkman, 1984)。このように考えられてきたストレス理論においては、高いレベルのソーシャルサポートはストレスの衝撃を和らげる役割を持つとされていた。ソーシャルサポートはストレスの評価的な反応を減じたり、そこに干渉することで、ストレスとなる出来事とストレス反応の仲裁的役割を果たし、また、ストレス反応を消去したり直接的に心理的過程に影響を与えることにより、ストレスの経験と病理的な反応を仲介するという。日本においても、死別経験とソーシャルサポートの緩衝効果の縦断的研究により、ソーシャルサポートが死別 1 年以内における自己報告による精神的健康と関連が見られたという結果から(岡林, 杉澤, 矢富, 中谷, 高梨, 深谷, 柴田, 1997)、死別経験者に対するソーシャルサポートへ関心が払われている。

ソーシャルサポートと抑うつ傾向の関連を、配偶者死別後の男女と配偶者のいる男女について比較した研究によれば、確かに未亡人は男やもめに比べてサポ

ートを受けてはいるが、まだ配偶者のいる人との比較により、死別後のサポートが抑うつ傾向を低めるといえるほどの関連はみられなかったという(W. Stroebe, Stroebe & Abakoumkin, 1999)。また、Stroebe & Stroebe(1987)によると、配偶者の喪失においてソーシャルサポートが寄与するのは、特定のサポートの要求と、ソーシャルサポートの可能性が合致したときのみであり、配偶者の喪失により引き起こされた欠損に取って代わることのできる程度によるとされている。

ソーシャルサポートは与える側ではなく、受け手の主観的な感覚が重要であるとされながらも、概して脆弱であると考えられている配偶者との死別経験者を有する男性がどのようなサポートを求めているのか、あるいは自ら求めていこうとするかなどの潜在的なサポート要求についての検討は、これまであまりなされていないと考えられる。

## (2) 死別のコーピングー死別後のコーピングとコーピングの性差

ある状況をストレスフルだと評価すると、その状況を統制する、あるいは状況に対する自身の感情的反応をコントロールしようとする。その対処方略として、ストレスーコーピング理論においては、情動焦点型コーピング対問題焦点型コーピングということが言われてきた。このようなコーピングに関する性差について、男性は女性に比べ問題焦点型のコーピングを行い、女性は男性よりも情動焦点型のコーピングを行うといわれてきた(de Ridder, 2000 など)。問題焦点型のコーピングの効果はストレスやストレス状況に依存するといわれ、状況が統制不可能なものである場合は有用ではないといわれていることから、問題焦点型のコーピングを行いやすい男性は、統制不可能な状況である配偶者の死別という状況に適応しづらくなるという(de Ridder, 2000)。しかし、死別経験後の悲しみをどのように対処していくかの男女差や、その結果をここで言われているコーピングの性差がどう説明できるかに関する研究はあまり無く、死別のコーピングに関する性差のパターンを現段階で特定することは難しい。

Stroebe ら(1999)によると、死別という経験は包括的なストレスであり、その適応のためには一次的、二次的なストレスへの対処が必要という。先述し

たコーピングで主に扱おうとしていたものは、Freudに端を発する grief work など、故人との絆に焦点を当てた一次的なストレスへの対処であるとされている。しかし、死の結果として生じる二次的なストレスへの対処も死別後の適応においては重要であるという。配偶者喪失後の対処パターンに関し、坂口ら(2001)は、故人との絆(一次的ストレス)とこれからの生活や人生(二次的ストレス)への対処に焦点を当て、一次的ストレスへの対処の仕方に関わらず、二次的ストレスに目を向けようとしなないものは、そうでないものに比べ精神的健康度が低かったという。二次的ストレスに対する方略は性差が見られなかったものの、二次的ストレスとしてこれまで挙げられている経済的問題、周囲との人間関係、死別後の雑事、家族関係の悪化、日常生活上の困難のうち、経済的問題や死別後の雑事においては、未亡人は男やもめに比べよりストレスであると感じ、家事や近所づきあい、生活規則といった日常生活において男やもめは未亡人よりもよりストレスであると感じているという(坂口,2001)。経済的問題や死別後の雑事は、夫が主な稼ぎ手であるとするなら、その後の遺産相続などの手続的な事柄は未亡人のほうが多く経験すると考えられ、家事や近所付き合い等は妻が担当していたとするなら、日常生活上の困難は男やもめの方が多く経験すると考えられる。また、このような二次的ストレスにおいて、経済的問題や死別後の雑事に比べ、日常生活上の困難のほうが精神的健康度の低さに関連があったという結果になっていた(坂口,2001)。

日常生活上の雑事においては、配偶者死別後も、家族などの同居者からのサポートを得られるような機会はあるとも考えられる。しかし、死別後の精神的健康において、家族形態の凝集性や葛藤性とは無関係であったということや(岡村,1994)、Hays(1992)による重篤な入院患者の配偶者に対する2年間の調査研究においては、患者の死後、男やもめは未亡人に比べ、ソーシャルサポートを求めようとする行動的側面が少なかったということなどから、死別経験後の男性の脆弱性に関しては、これまで言われてきていたソーシャルサポートの準備性も重要であるとは考えられるものの、それを実際に活用しようとするかの、死別経験者のサポートへの関わり方に関する探究も必要だと考えられる。

## 5. 死別研究のもうひとつの側面—死別経験からのポジティブな変化

これまでの研究では、配偶者との死別経験後の変化を身体的・精神的不適応等、ネガティブなものとして捉え、そこからいかに立ち直ろうとするかに焦点を当てたものがその大勢を占めている。このような研究の流れの背景には、Holmes & Rahe(1967)によるストレスフル・ライフイベントの研究において、配偶者との死別がそのランキングの1位になっていたということに端を発していると考えられる。これまで、死別という経験はストレスに満ちたものであり、そのストレスをいかに減じていくべきかということが主要なテーマであった。しかし、「苦痛に満ちた悲嘆のプロセスを経て、人は新たなアイデンティティを獲得し、より熟練した新しい人間として生まれ変わる」(Deeken, 1983)などという観点から、近年の死別経験の研究においては、わずかではあるが、死のもたらす喪失体験と悲嘆を、肯定的側面から捉えようとする向きもある。

配偶者との死別経験に限らない死別経験の研究において、ポジティブと捉えられる変化とは、友人との良好な関係などの社会的資源の高まり、自信などの人的資源の高まり、新たなコーピングスキル、もしくはより進歩したコーピングスキルの獲得の3つに加え、生への感謝や死の受容といったものがみられるという(Lehman, D.R., Davis, C. G., Delongis, A., Wortman, C. B., Bluck, S., Mandel, D. R., & Ellard, J. H.; 1993)。国内の研究においても、ライフスタイルの変化、死への態度の変化、人間関係の再認識、生への感謝、自己の成長、人生哲学の獲得、宗教観の変化などがあげられている(東村・坂口・柏木・恒藤, 2001; 坂口, 2002)。渡邊・岡本(2005)による死別経験による人格発達に関連する要因の検討では、男性の方が女性に比べて人格発達得点が低かったなど、配偶者との死別経験に限らず、広く死別経験者においては男性の方が女性よりも死別による人格的な発達が低く、比較的ポジティブな変化としては捉えられてはいないと考えられ、男やもめの脆弱性の一因となっているかもしれない。いずれにせよ、配偶者との死別経験者のポジティブな変化に焦点を当てた研究が、男やもめの脆弱性を探る上で必要となってくると考えられる。

## 6. 男やもめの研究の必要性

ポジティブ・ネガティブいずれにせよ、死別経験が女性の問題であると言われていたこともあるなど(Connidis, 1989)、男性側の死別経験の研究はほとんどなされていない(de Vries, 2004)。一般的に社会科学や社会心理学の研究は、男性の人生や経験に特化されているといった批判がなされるものであったが(Spence, Deaux, & Helmreich, 1985)、近年の生涯発達の研究は特に女性の研究であり、男性の生涯成達は隠されたものであるといった更なる批判も見受けられる(Thompson, 1994)。このような生涯発達研究における男性の軽視といったものもまた、男やもめの研究の少なさにつながっていると考えられる。

社会化において性差は生涯を通して広がっていくと考えられるが、男性も女性も同様に配偶者との死別を経験する可能性があることは疑う余地もないだろう。しかし、先に述べてきたように、配偶者との死別経験とは、異なる2つの性別において同じような出来事ではないと考えられる。実際、死別経験の研究においては、性差は一つの要因としてその悲嘆、適応、自己決定の過程に組み込まれてきたものである(Stroebe & Stroebe, 2001 など)。しかし、生涯発達研究においては、老年期の多くの男性は女性とは異なり、配偶者をなくした後に自分の人生を作り直し、一人で生活するといったことは想定しておらず、相対的に配偶者との関係性の中に閉じた生活を楽しむ傾向が強いという(Thompson, 1994)。このような関係性の中にいる男性が配偶者との死別を経験すると、情緒的なサポートや物理的なサポートを失い、配偶者以外の他者との関係性を持つとしないため、男やもめとして見えづらさを永続させていく(Moore & Stratton, 2003)。生涯発達における老年期といった用語もまた、男性を隠されたものとしている可能性がある。Thompson(1994)によると、男女を分けて考えようとしない老年期というイメージが社会的にあり、そのイメージがさらに、男性が年を重ねていくことを、女性的になっていくと考えるような傾向さえ生み出しているという。つまり、年を重ねるごとに性差を扱わなくなっていくという傾向が、中高齢者の男性への注意というものを不当なものにし、男やもめの見えづらさを更に助長していると考えられる。

以上のように、中高齢者における男やもめの実態はその見えづらさなどにより隠されたものとなっていたが、死別経験の研究における性差の検討などから、その心理プロセスを明らかにする必要があると考えられ、また、生涯発達における男性側の軽視といった点からも、中高齢者における男やもめの研究は今後必要となってくるだろう。

#### 引用文献

- Bowlby, J. (1980) *Attachment and Loss. Vol.3. Loss: Sadness and Depression*. Basic Books
- Connidis, I. A. (1989) Family ties and aging. Toronto, Canada : Butterworth
- Gallagher-Thompson, D., Fetterman, A., Farberow, N., Thompson, W. Larry & Peterson, J. (1993) The impact of spousal bereavement on older widows and widowers. in *Handbook of Bereavement : Theory, Research, and intervention* (pp.227-239)
- Gilbar, O., & Dagan, A. (1995) Coping with loss : Differences between widows and widowers of deceased cancer patients. *Omega: Journal of Death and Dying*, 31, 207-220
- Clayton, P., J. (1990) Bereavement and depression. *Journal of Clinical Psychiatry*, 51, 34-40
- Goldman, N., Korenman, S., & Weinstein, R. (1995) Marital status and health among the elderly. *Social Science and Medicine*, 40, 1717-1730
- 東村奈緒美・坂口幸弘・柏木哲夫・恒藤暁 (2001) 死別経験による遺族の人間の成長. *死の臨床*, 24, 69-74
- Hays, Judith C. (1992) Psychological distress, social environment, and seeking social support following conjugal bereavement. *Dissertation Abstracts International*. 53(5-A), pp. 1629
- Holmes, T. H., & Rahe, R. H. (1967) The social readjustment rating scale. *Journal of psychosomatic Research*, 11, 213-218
- Jeffery, R. W. (1989) Risk behaviors and health : Contrasting individual and population perspectives. *American Psychologist*, 44, 395-404
- 河合千恵子 (1984) 配偶者との死別後における老年期女性の人生—そのストレスと適応 *社会老年学*, 35-45
- 河合千恵子, 佐々木正宏 (2004) 配偶者の死への適応とサクセスフルエイジング—16年にわたる縦断研究からの検討— *心理学研究* 75, 49-58
- Lazarus, R. S., & Folkman, S. (1984) *Stress, Appraisal, and coping* New York Springer
- Lehman, D. R., Davis, C. G., Delongis, A., Wortman, C. B., Mandel, D. R., & Ellard, J. H. (1993) positive and negative life changes following bereavement and their relations to adjustment. *Journal of Social and Clinical Psychology*, 12, 90-112
- Lund, D. A., Caserta, M. S., & Diamond, M. F. (1993) The course of spousal bereavement in later life. in *Handbook of Bereavement : Theory, Research, and intervention* (pp.240-254)
- Martikainen, P., & Valkonen, T. (1996) Mortality after death of spouse in relation to duration of bereavement in Finland. *Journal of Epidemiology and Community Health*, 50, 264-268
- Moore, A. J. & Dorothy, S. (2003) *Resilient Widowers : Older Men Adjusting to a New Life*. Prometheus Books
- 岡林 秀樹・杉沢秀博・矢富直美・中谷陽明・高梨薫・深谷太郎・柴田博 (1997) 配偶者との死別が高齢者の健康に及ぼす影響と社会的支援の緩衝効果 *心理学研究*, 68, 147-154
- 岡村清子 (1994) 配偶者との死別に関する縦断研究—死別後の孤独感の変化— *老年社会科学* 15-2, 157-164
- Orly, M. & Eisenbach (2003) Mortality after spousal loss : are there socio-demographic differences ? *Social Science & Medicine* 56, 405-413
- 坂口幸弘・柏木哲夫・恒藤暁 (1999) 家族の死に関連して生じるストレス—「二次的ストレス」に関する探索的検討 *家族心理学研究* 13-2, 77-86
- 坂口幸弘 (2001) 配偶者との死別における二次的ストレスと心身の健康との関連 *健康心理学研究* 14-2, 1-10
- 坂口幸弘 (2002) 死別経験後の心理的プロセスにおける意味の役割 : 有益性発見に関する検討. *心理学研究*, 73, 275-280

- 坂口幸弘 (2004) 死別後の精神的健康に及ぼすソーシャルサポートの効果—サポート内容に関する検討— 関西福祉科学大学紀要 8, 107-117
- Schaefer, C., Quesenberry, C. P., & Soora, W. (1995) Mortality following conjugal bereavement. *American Journal of Epidemiology*, 141, 1142-1152
- Spence, J. T., Deaux, K., & Helmreich, R. L. (1985) Sex Roles in contemporary American society. In G. Lindzey & E. Aronson, *The hand book of social psychology*(pp.149-178). New York : Random House
- Stroebe. W. & Stroebe. M.(1993) The mortality of bereavement : A review. in *Handbook of Bereavement : Theory, Research, and intervention* (pp.175-195)
- Stroebe. W., Stroebe. M. & Abakoumkin, G (1996) The role of loneliness and social support in adjustment to loss : A test of Attachment versus Stress theory. *Journal of Personality and Social Psychology*. 70, 1241-1249
- Stroebe. M., Stroebe. W. & Schut, H.(2001) Gender differences in Adjustment to Bereavement : An Empirical and Theoretical Review. *Review of general psychology* 5, 62-83
- Thompson, E. H., Jr. (1994) *Older men's lives*. Thousand Oaks, CA : SAGE
- Umberson, D., Wortman, C. B., & Kessler, R. C. (1992) Widowhood and depression : Explaining long-term gender differences in vulnerability. *Journal of Health and Social Behavior*, 33, 10-24
- Vries, B. (2004) The Hidden Lives of Older Widowers. *APA Review of Books*, 49, 288-290
- 渡邊照美・岡本祐子 (2005) 死別経験による人格的発達とケア体験との関連. *発達心理学研究*, 16-3, 247-256
- Wortman, C. B., Silver, R. C., & Kessler, R. C. (1993) The meaning of loss and adjustment to bereavement. in *Handbook of Bereavement : Theory, Research, and intervention* (pp.349-366)

(修士課程)